2　会議内容

(1)基調講演

「都市発展の文化における多元的部分」
講演者　仲高（新疆社会科学院新疆文化発展研究センター副主任研究員）

「アジア太平洋都市サミット・第6回実務者会議」において，「多元的文化を通じての都市の発展」がテーマとして選ばれました。このテーマは，中国の辺境自治区にあり，多民族・多元的な文化を有するこのウルムチ市に，都市発展の文化面における多元的部分を詳細に見直す契機をもたらし，必ずやこの都市の全体的な発展の水準を高めるに違いありません。したがいまして，私は「都市発展の文化における多元的部分」をテーマとしてお話ししたいと思います。専門家・学者・指導者の皆様からのご意見・ご指摘をお願いいたします。

ウルムチは，典型的な多民族・多元的文化を持つ都市であり，その文化は多くの文化的源泉から育まれ，多元的に発展した複合文化として位置づけられています。民族構成を見ると，13の原住民族と30あまりの民族で構成されています。これらの民族は様々な宗教を信仰しており，仏教，イスラム教，キリスト教，道教などの宗教が共存しています。そのうえ，民族間の言語や文字も異なっています。原住民族の言語は，漢・チベット語族，アルタイ語族，チュルク語派，ツングース語派，モンゴル語派及びインド・ヨーロッパ語族などに属しています。市内の住民も，その出身は様々であり，中国各地から来ています。したがって，ウルムチの都市文化は一元的ではないということができます。このような都市文化は中国全土で唯一であるとまでは言えませんが，かなり独特なものであるといってよいでしょう。

なぜ，ウルムチにおいて，このような多元的な文化構造が生まれたのでしょうか，これは現代都市の発展にとってどんな意味があるのでしょうか。これらの疑問に答えるには，まず，新疆地域の多元的文化の基本的な類型と特徴について考察する必要があります。

1　地域多元文化から都市多元文化へ

ウルムチの多元的文化について話すときは，新疆における地域性多元文化に触れなければなりません。新疆はその古称を西域といい，1884年に新疆省の設立によって新疆と改称しました。それゆえ新疆の古代文化は西域文化と，近代以後のものは新疆文化ともいわれます。西域文化にしても新疆文化にしても，共に中国の地域性文化の一部であります。このような文化は多民族・多宗教・多言語的な多源発生・多次元発展の地域性文化であるた

め，複合型の中国地域文化ともいわれます。西域文化の基本的な特徴は，まとめていえば次のようになります。一つ目の特徴は，千年にわたる「シルクロード」の流通により，西域が東西文化交流の中枢となり，世界のいくつかの文明発祥地の文化がここで合流しあったこと，仏教・ゾロアスター教（中国で祆［けん］教または拝火教と称する）・マニ教・景教（ネストリウス派キリスト教の中国での呼称），及び東西の各種文化芸術形態がここで合流しあったこと，各種の異質外来文化と地元の固有文化が衝突・吸収・融合・整合しあったことにより，新しい文化が創り出されたことです。二つ目は，こういった新文化が，各発祥地の生態環境・生産生活様式・宗法制度の相違により，それぞれ違った文化類型を形成したことです。このような文化類型は，主にオアシス農耕文化，草原遊牧文化，開拓屯田文化に分けられます。そしてこれらの文化類型がいわゆる西域文化の基本的な構造と方向性を決定づけています。三つ目は，各種の西域文化がどれも多民族的な文化の態様を鮮やかに表していることです。各民族の文化は互いに他の文化を自分の文化の一部としようとしていますが，その間の文化衝突は一時的なものであり，文化吸収は恒久的なものであります。西域文化が持っているこれらの基本的な特徴は，都市文化の特質が間違いなく多元的なものであることを決定づけています。

西域早期の都市や町は，皆オアシス農耕経済文化と開拓屯田経済文化の産物であります。言い換えれば，定住民の経済文化は都市や町の経済文化の発生を促したといえます。遊牧民族は水と草を追って移り住むため，移住性と流動性が高く，都市を造って住みつくことは不可能で，またその必要もありません。遊牧民族が征服後に定住した土地の大部分は，農耕民族が築いた都市です。彼らは住み着いてから次第にオアシス定住民に変わり，生産生活様式もすっかり変化しました。

考古学的発見と文献資料により，新疆南部のオアシスには，遅くとも両漢から魏・晋・南北朝時代にかけて，多数のいわゆる「オアシス都市国家」が出現し，隋・唐時代に最盛期を迎えたということがわかっています。面積が比較的大きなオアシスは，シルクロードの要衝にあたるため，人口が比較的多く，地域特色のあるオアシス都市文化様式が形成されました。シルクロード沿いの于闐（うてん・ホータン），亀茲（ぎじ・クチャ），楼蘭（ろうらん），高昌などは皆，オアシスにある最も典型的な「都市」です。これらの都市国家の文化はどれも「同質異構」の文化形態となっています。同質とは，生産・生活様式や主流となる信仰が基本的に同じであるということ，異構とはそれぞれの民族や民間の信仰が異なっていて，異なった地域文化が形成されたということです。これらのオアシス住民はさまざまな民族に分かれていました。例を挙げると，于闐の住民は定住した塞種人系統に属して塞語を話し，亀茲の住民は吐火羅人（とひらじん）で吐火羅語を話し，高昌の住民は，はじめは河西回廊の漢民族が主でしたが，後に西へ移動した回鶻人（かいこつじん・ウイグル人）が主となりました。彼らはそれぞれ漢語・突厥（とっけつ）語などを話しました。民間信仰から見ると，于闐人は「地乳」を崇め敬い，「和田（ホータン）」という単語が本来「地乳」という意味を持っていました。また亀茲人は「龍馬神」を祭るため，「龍部落」と呼ばれていました。高昌の漢民族は漢民族の始祖神である伏羲（ふっき）と女媧（じょか）を信仰していました。しかし10世紀から16世紀の初めにかけて，カシ

ュガル，ホータン，クチャ，トルファン，ハミなど，地方の支配者と住民は相次いでイスラム教を信仰するようになり，新疆の南部と東部のオアシスはしだいにイスラム文化に転換する時期に入りました。

西域の草原遊牧民族には，順に塞種人，烏孫，大月氏，匈奴，柔然，突厥，蒙古などがおり，その言葉は異なる語族に属していました。彼らが移転・征服する間に，その一部分が南部のオアシスに入り，オアシス農耕定住民となりました。このように，自然にオアシス農耕文化の中にも草原遊牧文化が融け込み，オアシス都市文化にも草原遊牧文化の烙印が押されることになりました。回鶻は本来漠北草原の遊牧部落で，西暦 840 年に西へ移動し高昌・北庭に至ってから，徐々に環境に順応して生産生活様式を改め，オアシス定住民に変わりました。現存する高昌・交河故域は，前後して高昌の漢民族政権と回鶻汗国（ウイグル王国）の最も主要な都市となりました。

西域の開拓屯田文化は，漢王朝が西域を統一したことによって始まりました。西漢の神爵（しんしゃく）2 年（紀元前 60 年），漢王朝が西域大都護府を設置し，軍隊の駐屯・開拓を開始し，それによりこの地域の開拓屯田文化が生まれました。開拓屯田文化は唐の時代に大変栄えましたが，最盛期を迎えたのは，清の王朝が西域を統一してからのことでした。漢や唐の時期は，中原漢民族文化が西域のローカルな文化を統合し，西域に根付き，開拓屯田文化を誕生させた時期でもありました。中央の高級官僚がもたらした文化の普及や，物質的，精神的文化の広がりが西域文化の普及に重要な役割を担いました。清時代，特に乾隆帝の時期には，軍屯（兵隊屯田）・民屯（庶民屯田）・遣屯（罪人屯田）・回屯（回教屯田）と，様々な形式の開拓屯田を推進したため，漢民族，満州族，錫伯（シボ）族，回民族などの軍人や民間人が大量に進入しました。当時の軍の機関があった伊犁（イリ），恵遠（フイヤン）城，および開拓屯田に伴って発展してきたウルムチは，ともに新疆北部の主要都市となり，これらの二つの都市は，新疆南部にあるカシュガルとは様式においても特徴においても異なっています。

ウルムチは古代，塞種人，烏揭（うけい）人，匈奴人，柔然人，突厥人，オイラート蒙古人が遊牧生活を行う地でした。唐王朝が西域を統一した後，ここに町が築かれました。清王朝乾隆 23 年（西暦 1758 年），ここに軍隊が駐留して開墾を進め，ウルムチという町の最初の形になりました。乾隆 38 年（西暦 1773 年）には，バリクル道（役所）がウルムチにある鞏寧（きょうねい）城に移り，この地に都市の基礎が形成されました。清朝光緒 10 年（西暦 1884 年に），新疆省が設立されてからは，ウルムチは省都として定められ，省の首都としてのウルムチ市の礎が築かれました。ウルムチは清王朝の新疆統一と開拓屯田文化によって生まれたといえるでしょう。

2　多民族社会ウルムチの多元的文化構成及びその機能

清朝の乾隆 23 年（西暦 1758 年）から計算すると，ウルムチの「まちづくり」は約 250

年の歴史しかありません。しかしこの時代を見ると，西域の極めて長い歴史と多様な文化が受け継がれてきた中で，それに加えて，清朝時代以来の開拓屯田文化が発達したことがわかります。ウルムチ市の住民は，異なる民族集団に分けられ，異なる出自を持ち，異なる階層に分けられるため，それにより異なる文化が発達しました。例えば清王朝がウルムチを開拓し屯田制度を実行し始めてから，つまり清朝の乾隆年代ごろから，ウルムチには漢，回，ウイグル，カザフ，満州など十余りの民族が相次いで移り住みました。これらの民族はそれぞれ信仰が異なり，漢民族，満州族，錫伯族などが仏教（漢伝［漢民族の特色のある］仏教とチベット仏教に分けられる）を，ウイグル族，カザフ族，回族などの民族がイスラム教を，ロシア族がロシア正教を信仰しています。またそれぞれの言語は漢・チベット語族，アルタイ語族，インド・ヨーロッパ語族などに属しています。

このような多民族・多宗教・多言語が併存する都市社会では，その文化は必然的に多元的なものになります。そのうえ近代以後，西洋文化の流入が顕著であったため，文化構造がますます複雑になっていきました。私たちは近代ウルムチの文化構造を，以下のいくつかのポイントにまとめることができます。

一つ目は統一政治制度において文化が有する構造的同一性です。このような文化構成の下では，都市の各民族の小伝統（sub-tradition）が中華民族の大伝統(tradition)の方向性に一致しようとし，小伝統が大伝統の統一性に傾き，大伝統のもとの統一性がそれぞれの小伝統の差異より強いという特徴がみられます。また一方では，民族・宗教・言語などの差異のために，各民族の小伝統は多様でありそれぞれの個性を持っています。このように大伝統の政治文化の制限を受けている文化構造は，都市社会全体の安定と発展を保証する粘着剤であるといえます。二つ目は，中国と西洋文化が入り交じり調和せず結びついています。洋風の建物と古代の城壁が対立しながら共存する一方，衣食などの習俗文化の中には中国と西洋が入り交じっている滑稽な様子が見て取れます。しかし 1930 年代以後，国際情勢に重大な変化が起こったため，ウルムチの都市文化は中国と西洋が入り交じっている状態から，自らそれを吸収して自らの郷土や民族のものにし始めました。三つめは，都市と農民の文明が共存する文化構造であるということです。ウルムチの近代における都市住民の起源についていえば，誰もが伝統的農村・牧畜の社会からきた人々であります。このような情勢のもとでは，都市文化が農村文化に影響を与えるのではなく，農村文化が都市文化に影響を与えます。農村文化は物質文明から文化の土台をなす構成へと，力強く都市文化の歩みを左右しています。もちろん都市文化は伝統的郷土文化の中から物質文明・精神文明の養分を吸収することができますが，伝統・保守的な個々の農民経済思想は都市が近代化する時の足かせになってしまうこともあります。

清朝の末から，ウルムチは西方の強力な文化の影響を受け，近代工業やメディアや文化に関する近代施設が相次いで出現しました。ウルムチの都市文化は，古い文化から近代的・現代的な文化への転換をふらつく足取りで始めました。そのような状況の下で，辺境の多民族都市としてのウルムチの都市文化は，新しい機能を有するようになりました。特に1930～40 年代においては，都市文化は次のような新しい機能を発揮しました。まず挙げられるのは凝集機能です。ある民族の小伝統についていえば，人々は往々にして自民族の習

俗，習慣，言葉，身体的外見などの文化的特徴を通じて，凝集力を形成します。ある多民族の多元的文化コミュニティーの中では，同じ思考モデル・同じ道徳規範・同じ価値観などのような文化構造が，大伝統の趨勢に傾く性質を示し，とりわけ他所からの侵入が起こった場合，力強い民族凝集が行われます。また，規範の役割があります。ある民族的な文化システムの中で，社会の一人一人は一般的に地域の取り決めや民間の決まり事などの自民族の習俗文化に縛られています。これはその一族の一人一人を制限するには積極的な働きがあることに違いはありませんが，都市社会全体に対していえば，ただ「地域の取り決めや民間の決まり事」だけでは不十分であり，社会道徳・法律制度・職業モラルという方面の制限を設けなければいけません。そうしてこそ初めて都市社会は支障なく動くことが出来るのです。ただし，このような文化の役割は時と場合によります。

3　都市発展の文化における多元的部分

今回の会議のテーマを「多元的文化を通じての都市の発展」に決定したことは，非常に賢明な選択だと思います。このテーマは，都市発展の中で文化的な次元という問題が注目されるようになったことを明らかにしています。しかしながら，現在のウルムチの都市発展の趨勢から見ると，一貫して「発展」と「文化」の関係には，若干の誤解が存在しています。一つ目は，「経済発展が文化発展と同じである」という誤解です。二つ目は，「市場経済における商業文化が文化そのものと同じである」という誤解です。三つ目は，「伝統文化が近代化を妨げる」という誤解です。四つ目は，「文化資源を発展の原動力と見なす」という誤解です。もちろん，まだいくつかの誤解を挙げることができますが，これら４つが比較的典型であるといえるでしょう。ウルムチのように発展途上地域である中国西部の辺境都市は，全国の政治・経済の中心ではなく，文化の中心でもありません。せいぜい「勢いを蓄えて大開発を待っている多元文化共存の発展途上都市である」といえるでしょう。中国では改革・解放政策がはじめられてから20年が立ちました。過去20年において，あらゆる階層において「経済発展」を中心とする党や政府の政策は，まぎれもなく正しいものでした。例外なく，ウルムチもこの発展の軌道に乗りました。国内総生産，利潤，経済効果，利益，そして財産などが追求目的になりました。このような発展の方法では，経済は舞台の上での演じ手であるのに対し，文化は所詮舞台を作るためのものに過ぎません。結果的に，文化はますます周縁に追いやられ，文化と秩序に関する目的が冷遇されてしまいました。もし生産目標が私たちが追求すべき全てのものであり，それに相応しい文化と秩序の目標が互いに補いあって進められなければ，都市の発展は行く末を見失うことになるでしょう。そのため我々は経済と文化との一体化を追求するべきで，文化は都市の発展という舞台の上の中央にいなければなりません。以上のことをふまえ，皆様のご参考までに，いくつかの提案をいたしたいと思います。

（１）都市発展のための新しい文化の骨組みを作り上げなければなりません

ここ数年間，わが国政府は調和の取れた社会発展，科学的な発展の概念など，社会の発展に向けた中国の特色あるコンセプトを打ち出してきました。この新たな構想では，単純

に国内総生産を高めようとする目標に限っているのではなく，文化と秩序に関する目標もますます重要視することが明らかになっています。この目標は，三つの段落に分かれています。一つ目は，環境保護，貴重な自然資源の保護，あるいはその代替物を探すこと，また人口管理などの，目下人々が関心を持っている問題です。このような問題は文化の分野と切っても切れない関係があり，都市発展においては率先して模範を示すべきです。二つ目は，全ての人々の生活レベルの向上を目指す際には，人々の心に深く浸透している文化的価値に配慮しなければならないということです。都市コミュニティーにおいては，ただ物質的な豊かさだけでは絶対に不十分であり，物質的な豊かさそのものは生活の質を表す指標にはなりえません。そして単純に物質的財産のみを追求すれば，容易に享楽主義と文化的虚無主義（ニヒリズム）に陥りかねません。三つ目は，人類の発展そのものは文化が土台となっています。都市の発展においては，都市住民の基本的あるいは最低限の需要，すなわち栄養，教育，健康，住まい，就業，休息などに配慮しなければなりません。これらの問題は，等しく文化と有機的に繋がっています。

都市の発展における，文化や秩序の目標と発展の間には，次のような関係があると思います。秩序が発展の必要条件であり，そして急速な社会変革の中で，文化は緩衝作用を持ち，改革の衝撃と被害を最小限に減らすことができるのです。

（２）都市発展において伝統的な価値と近代的な価値との符合を重視すること

「伝統」には，二層の意味が含まれています。一つは伝統的な文化を，もう一つは文化的な伝統を指します。伝統的な文化は具体的，物質的あるいは精神的な文化を指し，すでに完成した過去の文化を指します。それに対し，文化的な伝統はその民族や集団を支配する観念であり力であり，文化的な精神とも呼ばれます。したがって，これは人々が日常生活の中でしたがっているモデルであり，人々がそれに従って行動しながら，しかしその存在を意識していない一種の精神的な力です。伝統的な文化と文化的な伝統の関係についてですが，伝統的な文化は歴史の発展過程で消失するかもしれませんが，その精髄あるいは価値観などの文化的な伝統は，その後の文化の中に保存され得ます。近代化は，世界についていえば，歴史的・発展的・総合的な概念です。西方の近代化が他の国家より早いとはいうものの，我々がいう現代化は決して西洋化ではありません。伝統が近代化と符合できるかどうかということには，様々な見方があります。その一つの見方では，現代化の実現で，必ず伝統と現代化との衝突が起こるとのことで，その間には互いに排斥し合い，共存出来ず，引き起こされる結果も，まったく異なってしまうと考えられています。もう一つの見方では，伝統と現代化とが符合できるものであり，ある国や民族の文化伝統は現代化の発展需要に適応出来るものであると考えられています。余英時氏は，「総体的に見れば，中国の価値系統は近代化ないし『近代以後』のチャレンジに耐えられ，その存在のよりどころを失ってしまうことがない。もちろんそれぞれの大文化はどれも多くの変遷を経たが，その価値系統の中心部分は今でも活力に満ち溢れている。」と，お考えになっています。ウルムチの発展の近代化の過程において，我々は伝統的な文化と文化的な伝統に対し，近代化の必要に応じて，それぞれ違う態度を取るべきでしょう。その一つ目は，伝統の中の遅れ，さらには腐敗を残らず取り除くことです。二つ目は，取捨選択を進めることです。

例えば我々が持つ伝統文化の中に，早くから存在していた自強不息（「自らつとめ励んでやまない」の意）・正道直行（「正しい道をまっすぐ行く」の意）・求是務実（「実際に基づいて正しく行動する」の意）・豁達楽観（「こせこせしないですべての物事を良い方向に考える」の意）などの文化精神をすべて合理的に受け継いで発揚することが出来ます。三つ目は，作り変えることです。ある伝統的なものは，内容は時代遅れになっているものの，その形式は依然として有用であり，作り変えられた後，新しい内容が与えられます。

（3）多民族の文化資源を再編成し再分配すること

私たちが生活する都市の多民族的な多元文化は精神的な財産であり，これは自然資源と比べると，尽きることのない再生可能な資源であります。このことはますます多くの人々に認識されるようになりました。ウルムチの多民族的な多元文化は強力で確固たる文化的基盤を持ち，また改革開放の中で新しい活力が注ぎ込まれ，観光文化産業開発の重要な支柱となりました。そうはいうものの，文化資源開発の中で楽観視できないことは，一つには，多民族文化資源の喪失，自発的な発生，自然消滅を放置することであり，もう一つには，市場原理における利潤を追求しようと，急功近利（「目前の功利を求め急ぐ」の意）して，順序を考えず，むやみやたらに開発・発掘することです。文化資源にとって，これは大きな破壊となります。

我々の新疆がいわゆる資源大区（莫大な資源がある自治区の意）だということには，二重の意味が含まれています。一つは自然資源が豊富にあることであり，もう一つは文化資源が豊富であるということです。ウルムチの発展も，その二種類の資源を合理的かつ秩序の下で利用できるかどうかにかかっています。とくに文化資源を合理的かつ秩序正しく開発するには，文化資源を再編成し再配分することが必要です。文化資源の再編成及び再配分には，私たちは以下のような方向で行動するべきです。

一つ目は，国際・国内二つの市場に向けて文化発展の戦略を定め，文化資源の利点を生かして，文化産業の発展を促進することです。それには，戦略的な計画を持ち，文化産業の発展を導く政策や法令を定めること，文化を管理し運営する体制を改革すること，文化製品の生産・人材育成・投資融資に関するメカニズムを改善すること，文化需要を拡大すること，文化消費を導くこと，文化市場を育成することが必要となります。

二つ目は，文化のイメージ・文化の品位・文化のネームブランドを創造し，文化資源の再編成と再配分を定めるべきだということです。ウルムチの都市発展で，どのような文化イメージを樹立するか，どのような文化品位を確立するか，どんな文化のネームブランドを製造するか，これらは深く掘り下げて取り組む価値がある問題です。私はウルムチが更に文化の魅力に満ち溢れた都市になることを希望しております。これはウルムチの独特な長所なのです。

三つ目は，地理的，文化的な特徴を生かし，地域と民族の特色ある観光文化産業を発展させることです。ウルムチはシルクロードを通る際に避けて通れない場所であり，これは

私たちの地理的利点です。そして多彩な多民族文化は我々の文化的利点であります。チャンスをしっかりとつかみ，適切な手段を実施すれば，ウルムチは全新疆，全中国，中央アジア，さらには世界に向けて，その特色ある観光文化のパワーを発揮することが出来るでしょう。

(2)各都市からの発表

1．バンコク市

「バンコク市における多元的文化を通じての都市の発展」

バンコク市　文化スポーツ観光部　企画政策課長

スエチャロエン・スクリッタ

バンコク市と多元的文化という視点

1　文化に対する意識は，住民の間に，共同社会の一員であるという感覚や公共団体への帰属意識を形成するために，とても大切なものです。同じ地域に居住する人々が，互いの文化や経験を共有することになります。

2　多元的文化（文化の多様性）に対する意識はバンコク市にとって人種，民族，ジェンダー，宗教，経済社会的地位，知的または身体的能力によるグループ（ただし，必ずしもこれらに限定されない）の歴史，価値，経験，行為，交流（相互関係），情動を理解するための重要な手段になります。

多元的文化に対する認識は人事，実務のやり方，ネットワーク，安全，組織構造に影響を与えます。

バンコクは多元的文化を自覚した運営を行う団体として，最大限のパフォーマンスを上げるために，上記に述べた点を理解し，活動する必要があります。

多元的文化は，コミュニティーや都市において，それぞれが一人でないことを人々に認識させるための視点を理解することです。人々は，そうすれば相違と類似がある環境の下で，都市の発展に寄与することができます。

この問題に対するバンコク市の最上の方法は，都市の他の文化を受け入れることであり，それらからより多くのことを学ぶということです。

都市の発展には多くの手段があります。しかしながら多元的文化を育んでくことは都市の発展にむけての，バンコクの施策の中の主要な戦略の一つであると考えられています。

紛争を減少させ，問題を解決するためには，単一文化を促進し，発展させるようなことはするべきではない，というのもそれは，様々な文化に対して，その活動を共有し参加す